

九州地方出土の和同開珎

櫻木 晋一

I はじめに

九州内で出土している和同開珎は、20 地点で総数 54 枚を数える。このうち古代遺跡から出土しているものは 18 地点 52 枚である。他の 2 枚は、福岡県本城的場遺跡と若宮町から出土した中世の一括出土銭に 1 枚ずつ含まれていたものである。2000 年 9 月に出土銭貨研究会第 7 回大会が金沢で開催された際、筆者は西海道で出土している古代銭貨¹を集成したが、あれから約 7 年が経過した現在でも出土事例はほとんど増加していない。したがって、まず第 7 回大会資料である『畿内・七道からみた古代銭貨』に筆者が記述した文章を引用する。「西海道で出土している古代銭貨は、総数 315 枚+アルファで、数量的に多いとは言い難い。その最大の理由は、西海道が畿内から距離的に遠く隔たっているためであると考えられる。つまり、律令国家の政治権力の及ぶ範囲が畿内を中心としていた地域であったため、西海道までは銭貨供給が十分にできていなかったためと推定できる。西海道で出土した古代銭貨の出土状況についてまとめると、以下のとおりである。①墳墓・祭祀遺構など意識的に埋納されたものも多く、これらのケースでは、和同開珎から富寿神寶までの小型化する以前の銭貨が主体である。②墳墓・祭祀遺構以外の遺構から出土しているものは、中世の一括出土銭を除くと、官衙や国分寺など公的施設の存在や官人が存在していたと推定できる場所が主体である。③西海道では、無文銀銭・富本銭・和同開珎銀銭など、日本貨幣史上初期に位置づけられる貨幣の出土は確認できていない。④饒益神寶・寛平大寶の出土例は現在のところ確認できていない。⑤豊後・肥前・薩摩・大隈・壱岐・対馬国では、現在のところ古代遺跡からの出土例を確認できていない。⑥発行量の多い銭種ほど、出土量が多い傾向にあると考えられる。⑦100 枚以上一括出土した例は、筑前国宗像市三郎丸今井城遺跡の 121 枚のみである²。⑧肥後国の事例は、駅・郡衙・国衙関連遺跡からの出土であるが、官道沿いに営まれた施設に集中している点が特徴的である。」

近年の古代銭貨に関する新出資料は、福岡県荏田町雨窪遺跡³の萬年通寶 1 枚や熊本市二本木遺跡群第 16 次調査⁴の隆平永寶 1 枚など数地点に過ぎず、和同開珎については、太宰府市と福岡市の博多遺跡群で出土が確認できただけである。

II 出土分布と遺跡・出土地の性格

九州内の古代遺跡から出土した和同開珎について旧国別に出土地点を見てみると、筑前が 14 地点と群を抜いており、肥後が 2 地点、筑後・豊前が各 1 地点である。出土している絶対数は少ないが、筑前の中でも大宰府と博多に集中して出土していることを確認できる。「遠の朝廷」と称された大宰府に出土例が多いのは当然としても、博多遺跡群でも 6 地点から出土している。博

多の場合、大宰府の外港としての機能を有していたことや、近くに鴻臚館が設置されていたことから、文献上では博多に明確な古代の官衙などの存在は確認できないものの、出土する古代銭貨の状況から公的施設や役人などの存在を推測できるのではないだろうか。三郎丸今井城遺跡出土の古代銭貨百余枚は、律令時代に中央と強い繋がりを有し、宗像地域を治めていた有力氏族宗像氏との関連が想定されている。

出土地の性格は、祭祀遺構とされるものが5遺跡（大宰府条坊第88次調査 SX655・宝満山上宮祭祀遺跡・妙見遺跡第1次調査・大宰府条坊跡第264次調査・三郎丸今井城遺跡）、墓が4遺跡（君ヶ畑遺跡・結ヶ浦火葬墓・汐井掛5号墳墓・高良山町杉谷）、住居址や柱穴が5遺跡（博多遺跡群第37次調査・博多遺跡群80次調査5・博多遺跡群第126次調査・小峰遺跡第1次調査区・新屋敷遺跡第7次調査区）、確定できないものが4遺跡（博多遺跡群築港線第2次調査・博多遺跡群第32次調査・博多遺跡群第59次調査・尾畑遺跡）である。

博多遺跡群の場合、調査の主体は中世都市であり、その下層に展開する古代の遺構は遺存状態が悪く、性格などの把握が難しい。博多遺跡群から古代銭貨が出土した地点を図20に示した。（地図上の番号は一覧表の番号と一致する）博多遺跡群は昭和通りを中心とする北側の息浜と、明治通りより南側に位置する博多浜という大きく二つの砂丘上に分かれて展開する。古代銭貨の出土地点は、櫛田神社・聖福寺・承天寺で図まれた博多浜の中心部にびったりと重なって出土している。この博多浜は人々が生活する場として古代から存在しており、息浜は鎌倉時代の後半以降になって文献上に名前が登場することから、この出土の様相も当然と言えば当然である。しかしながら、これだけの地点で集中して和同開珎やその他の古代銭貨が出土している事実から、逆に官衙などの存在を想定できるのではないだろうか。また、尾畑遺跡も官衙と考えることができることから、和同開珎は総じて官衙地区やその近接地で意図的に埋められたものが多いのではないかと考えられる。

以下に、『報告書』『市史』『現地説明会資料』から、遺跡の立地や出土状況について記載されている内容を記す。

■祭祀遺構

★大宰府条坊第88次調査 SX655

「ピットの両側を後世の遺構で切られ当初の姿は明らかでないが、推定長0.63m、幅0.38m、深さ0.09m以上の長円形を呈している。ピット内やや東寄りに、須恵器杯が蓋をかぶせた状態ではほぼ正位置の状態を検出された。杯の中から和同開珎5枚が、杯の内側に貼り付くようになり、杯内に何らかの埋納品（有機質のものか）を納め、その周りに銭を差し込んだものであろう。」とあり、胞衣埋納用の可能性もあるが、地鎮遺構と考えるのが妥当であるとの指摘がある。

★宝満山上宮祭祀遺跡

宝満山（標高830m）の頂には延喜式内社竈門神社上宮が鎮座している。和同開珎は採集された資料である。これは8世紀後半から9世紀代の山頂露岩上での祭祀に関わる遺物と考えられている。

★妙見遺跡第1次調査と大宰府条坊跡第264次調査で出土している和同開珎については、正式な報告書の刊行を待つて考察したい。

★三郎丸今井城遺跡

三郎丸古墳群は遠賀群岡垣町と境をなす標高369.3mを最高所とする城山南麓の舌状丘陵上に位置する。三郎丸今井城遺跡は、その丘陵の東側縁辺、標高11～13mの緩斜面上に位置し、祭祀用の土坑から大量の銅銭が出土した。偏楕円形をした土坑は長径が60cm、短径50cm、深さは16cmあり、中には須恵器の杯身15点とガラス小玉、それに数種類の銅銭100余枚が埋納されていた。判読できたものは、和同開珎1枚、萬年通寶2枚、神功開寶18枚である。8世紀後半の特徴をもっている須恵器は、埋納するときすべて意図的に割られており、復元するとほとんど完形品になる。また、ガラス玉と銅銭は紐が通されており、数単位の連なりで埋納されていた。これらの出土状況などから、土坑は単なる廃棄物の投棄坑ではなく、8世紀後半に属する遺構であることが判明した。

■墓

★君ヶ畑遺跡

昭和30年3月に出土しており、薬壺形須恵器内に1枚の和同開珎が納入されていた。有翼骨壺は、総高15.8cm、身高14.8cm、口径13cm、底径12.2cm、蓋高3.8cm、径16.6cmである。粗い胎土の薬壺形須恵器で、舌状の把手をつけた身に肩部の張りがあり、ゆるやかな丸味を持った底部には低い高台をつけ、口頸は立ち上がって心持ち外開きとなっている。文献には写真が載っており、結ヶ浦火葬墓のものと酷似している。

★結ヶ浦火葬墓

昭和21～22年頃発見された。出土地点は西南に流れる山丘の一支脈の端頂部の西南斜面で、70mと75mの両等高線の間にある。発見者によると何等の外部施設もない地表下3尺で蓋に達し、身は真直に埋められ正しく蓋がされていた。器内には土砂も水もなく、骨も完全に消失していた。7枚の銭貨はすべて互に錆着してはいなかったという。器の内底に1枚の錆着痕を残している。現存の2枚は共に和同開珎で、他も同様と思われるが、当時直ちに破棄されて検し得ない。蔵骨器は須恵器で把手を二個持っている。蓋・身共、器壁の内外表面は、ねずみ色で、器内は赤褐色を呈し、砂粒をかなり含み、その状態は全く等しく、当初よりセットとして製作されたものと思われる。

★汐井掛第5号墳墓

汐井掛第5号墳墓の墓壙内より銅銭の出土があり、まず骨蔵器の底部を取り上げてみると、底部外側にはほぼ接して銅銭3枚が重なりあっており、これをM1とする。M1は3枚で上より萬年通寶、2枚目3枚目は重なっているので判読できない。さらに骨蔵器を取り巻くように、M1を中心にほぼ「十字形」に配列して検出される。北西方をM2、南西方をM3、南東方をM4、南東方をM5とする。M2は5枚のようであるが1枚目は錆がひどく判読できない。以下重なり合ってこれも判読できない。M3は5枚が重なっているが、これは一枚一枚剥ぎ取れたので、1枚目より和

同開珎、神功開寶、3枚目は錆で剥ぎ取りができず、4枚目は神功開寶、5枚目は和同開珎である。M4は3点と思われるが、1枚目は遺存が悪く〇〇〇寶だけで、2枚目は神功開寶、3枚目は萬年通寶である。M5は3枚重ねで、3枚とも和同開珎であり、以上M1からM5までの合計19枚である。

★高良山町杉谷

矢野一貞の『帰厚遺物縮図』（嘉永5年）に「御井郡高良山町杉谷名上峰地中以石囲之、方三尺許、内有此器倒伏、其和同開珍錢一枚有之、此器色紫而堅剛如石、内有渦形」とあり、「方三尺許」の石囲いの中に収められていたというので、西谷火葬墓群中にある小石室を営むものと同様な構造であろう。須恵器の中から和同開珎1枚出土している。

■住居址・柱穴

★博多遺跡群第37次調査

E-4区に位置する径60cmの円形プランをもち、60cm遺存の柱穴から和同開珎1枚が出土している。8世紀の柱穴と考えられ、和同開珎は径25mm、最大厚1.6mmである。

★博多遺跡群80次調査

4面のピット2304から和同開珎1枚が出土している。

★博多遺跡群第126次調査

1面で検出された小穴226の覆土中から和同開珎1枚と、ここから約1mの距離に位置する小穴227の覆土中から和同開珎1枚が出土している。小穴226は不整な隅円長方形の小穴である。断面は逆台形状で、長さ0.5m、幅0.4m、深さ0.5mを測る。小穴227は不整な円形状で筒状を呈す。径0.6m、深さ0.5mを測る。小穴226から出土した和同開珎は一部に孔を生じ、全面錆に覆われ、錢銘は不明瞭で、径は24.6mm、厚さ1.6mm、重量は保存処理後で1.6gを測る。小穴227から出土した和同開珎は、径は25.7mm、厚さ1.6mm、処理後の重量で1.6gを測る。錢銘はかろうじて判読できる。

★小峰遺跡第7次調査区

立田山南西緩斜面の西海道（推定）東側に隣接し、竪穴住居跡11軒・道路状遺構6条・掘立柱建物跡1棟を検出し、竪穴住居跡の1軒から和同開珎が1枚出土している。共伴遺物としては土師器があり、8世紀後半であると考えられている。

★新屋敷遺跡第7次調査区

白川左岸扇状地の集落で、竪穴住居跡8軒・土坑3基・柱穴群を検出し、住穴より和同開珎が1枚出土した。共伴遺物としては土師器・須恵器・緑釉陶器・越州窯系青磁があり、8c後半～9c初頭であると考えられている。

■不明

★博多遺跡群築港線第2次調査と博多遺跡群第32次調査出土のものについては、詳細不明である。

★博多遺跡群第 59 次調査

7～8 世紀の遺物が包含された第 5 面（暗茶褐色シルトか砂層上面）から和同開珎 1 枚が出土している。和同開珎は径 25mm、最大厚 1.6mm で、ある。

★尾畑遺跡

尾畑遺跡は伊呂波川が北方へ大きく蛇行した内側の低段丘に位置する。12 棟の奈良時代掘立柱建物群を検出している。調査区西辺部の 2 次堆積土層中から和同開珎が 1 枚出土している。尾畑遺跡の性格については、「尾畑遺跡の場合、建物の規模、構造については官衙とされる例に比べ小規模で貧弱である。しかも配置については、調査範囲の規制により全容が明らかになっておらず不明確である。確認された建物群は一定の配置と規格性が認められ、この地域での当該調査遺跡の僅少さを考慮しなければならないが、一応、一般集落とは異なり、機能の分担が進んだ配置をもって官衙的性格を具有する可能性が示される。」とある。

Ⅲ 個別出土銭研究 6

九州では和同開珎のみならず、古代銭貨の研究は出土例が少ないことから難しい。しかしながら、個々に出土する銭貨については、さまざまな角度から考察を加えなければならない。近年の出土銭貨研究で、単体や数枚程度で出土する個別出土銭の性格など、その位置づけが重要になってきていると思われる。なぜ銭貨が出土するのかといったことについては、調査時点で正確に記録されないと、復元が困難になる。銭貨は小さな遺物であり、検出が難しいというのも事実であるが、可能な限りの報告をすることが望まれる。

個別出土銭は経済活動の結果、落とされたものと考えられているのが常である。つまり、市場などで使用している貨幣が偶然失われ、それらが検出されると考えられているのである。西洋貨幣史研究における single-find という用語は、まさにこのような貨幣をさしているのである。しかし、日本の古代銭貨について概観すると、中世以降の銭貨とは異なり、祭祀や墓など人為的に埋められたものが出土すると言って良さそうである。したがって、経済活動の反映として銭貨をとらえることができないということになる。律令国家で作られていた銭貨は、中・近世銭貨とはその流通量や基本的な役割が異なっていたと考えられる。貨幣は本来、経済的機能と経済外的機能を不可分に有しており、古代社会においては経済外的な機能が今日に比して前面に押し出されてきているのではないかと考えられる。

〔参考文献〕

- | | | |
|---------|------|-----------------------------------|
| 櫻木 晋一 | 1993 | 「九州出土の皇朝十二銭」『古文化談叢』第 30 集（中） |
| 櫻木 晋一 | 1993 | 「博多遺跡群の出土銭貨（2）」『博多研究会誌』第 2 号 |
| 出土銭貨研究会 | 2000 | 『畿内・七道からみた古代銭貨』出土銭貨研究会第 7 回研究大会 |
| 高倉洋彰 | 1982 | 「九州出土の皇朝十二銭」『海の中道遺跡』福岡市埋蔵文化財調査報告書 |

〔注〕

- 1 「宝」や「寶」は「寶」、「万年」は「萬年」に統一して表記した。
- 2 『宗像市史』には百余枚とあるが、筆者が塊の側面から枚数確認をした数が 121 枚である。
- 3 福岡県教育委員会 2004『東九州自動車道関係埋蔵文化財調査報告-1-』（86 ページ）によると、1B 区下層から萬年通寶 1 枚が出土している。包含層発掘中のことであり出土状況の詳細は把握できていないとある。
- 4 『熊本市埋蔵文化財調査年報第 5 号』熊本市教育委員会稲津暢洋のご教示によると、万日山南麓扇状地にある飽田国府推定地西側集落の小穴から隆平永寶 1 枚が出土している。
- 5 Pit2304 から出土しており、このピットの性格は不明だが柱穴として分類した。
- 6 鈴木公雄編『貨幣の地域史』（岩波書店 2007）に、筆者は「出土錢貨からみた中世貨幣流通」という一文をまとめた。個別出土錢などの用語規定や錢貨が出土する意味、西洋貨幣史との比較研究などに言及しているので参考にされたい。

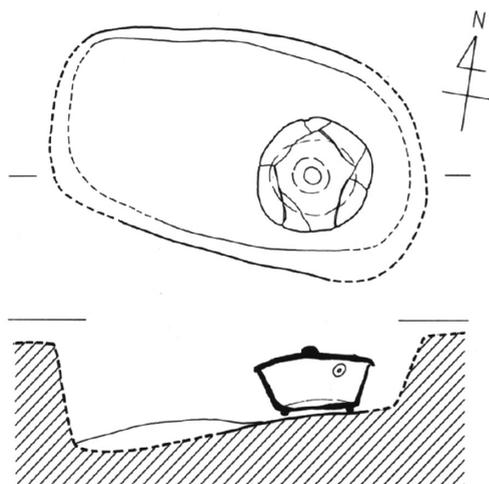


图1 太宰府条坊第88次調査SX655地鎮遺構

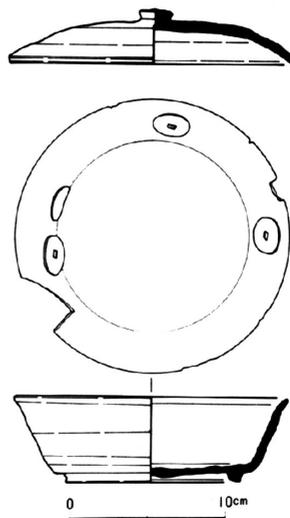


图2 SX655須恵器杯・和同開珎

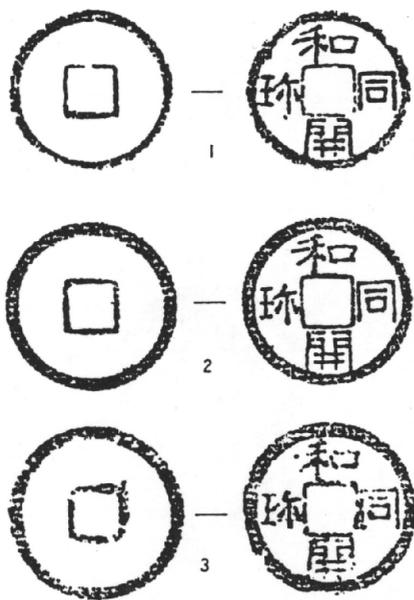


图3 宝満山上宮祭祀遺跡出土和同開珎



图4 結ヶ浦火葬墓出土和同開珎

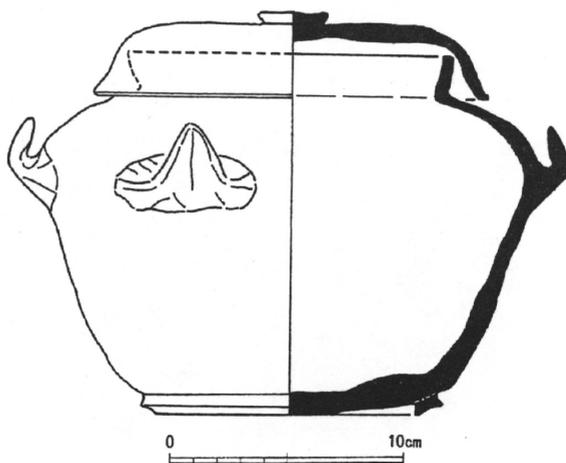


图5 結ヶ浦火葬墓骨藏器

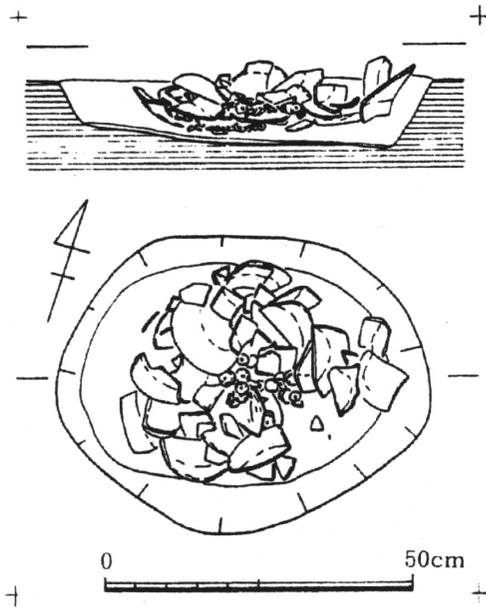


図6 三郎丸今井城遺跡SK37 祭祀土坑

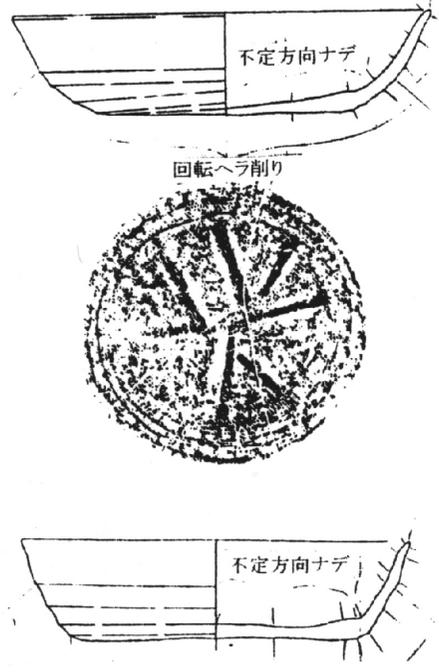


図7 祭祀土坑共伴須恵器杯身



図8 三郎丸今井城遺跡出土和同開珎・神功開寶・萬年通寶

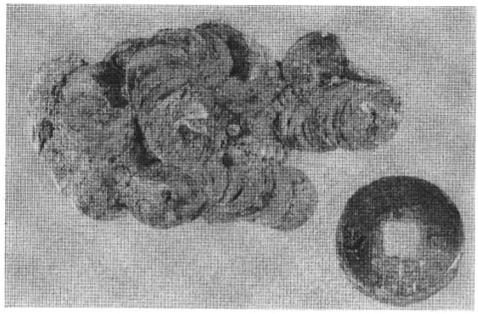


図9 三郎丸今井城遺跡出土銅銭写真

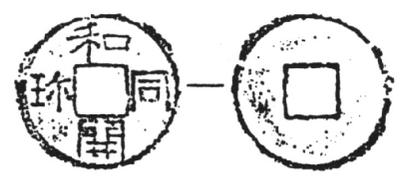


図10 的場遺跡出土和同開珎(一括出土銭)

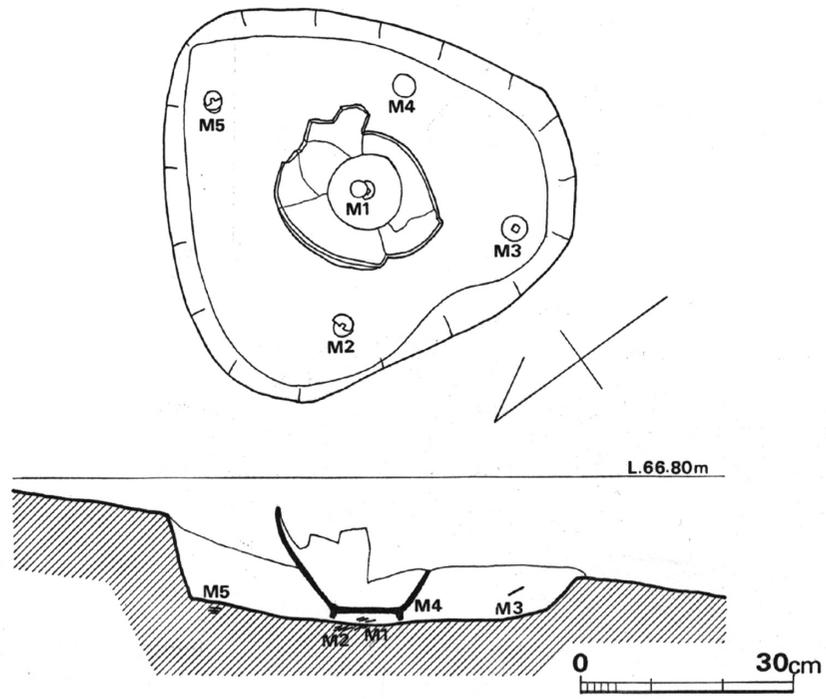


图 11 汐井掛第 5 号墳墓実測図

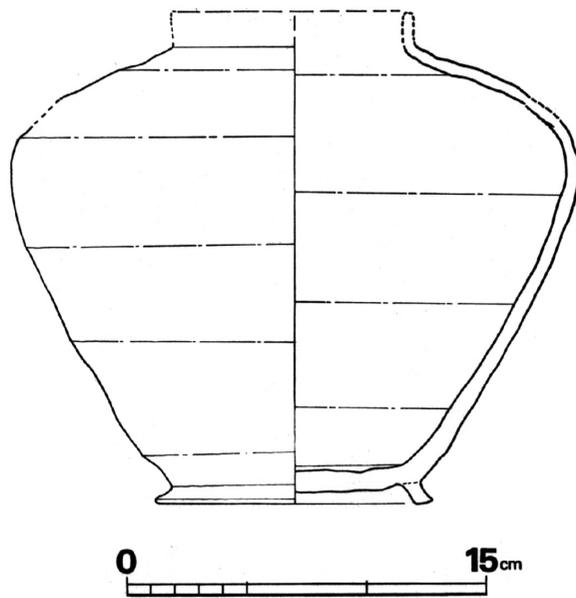


图 12 汐井掛第 5 号墳墓出土骨藏器実測図



图 13 博多遺跡群築港線第 2 次調査

出土和同開元

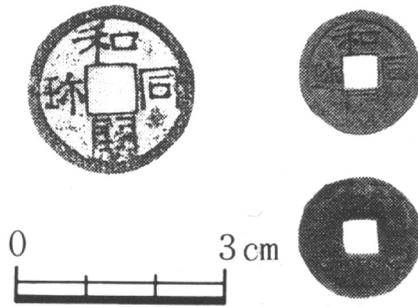


图 15 博多遺跡群第 59 次調査出土和同開元



图 14 博多遺跡群第 37 次調査

出土和同開元



图 16 博多遺跡群第 80 次調査

出土和同開元

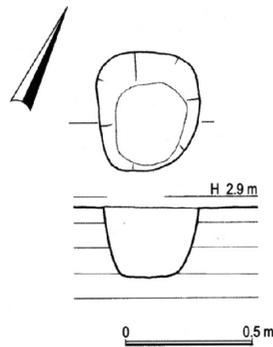


图 17 博多遺跡群第 126 次調査小穴 226

小穴226



小穴227

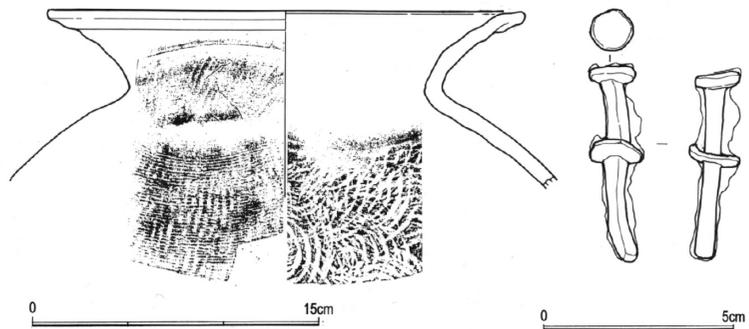
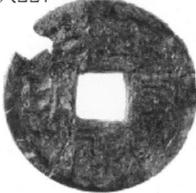


图 18 博多遺跡群第 126 次調査小穴 226・227 出土遺物

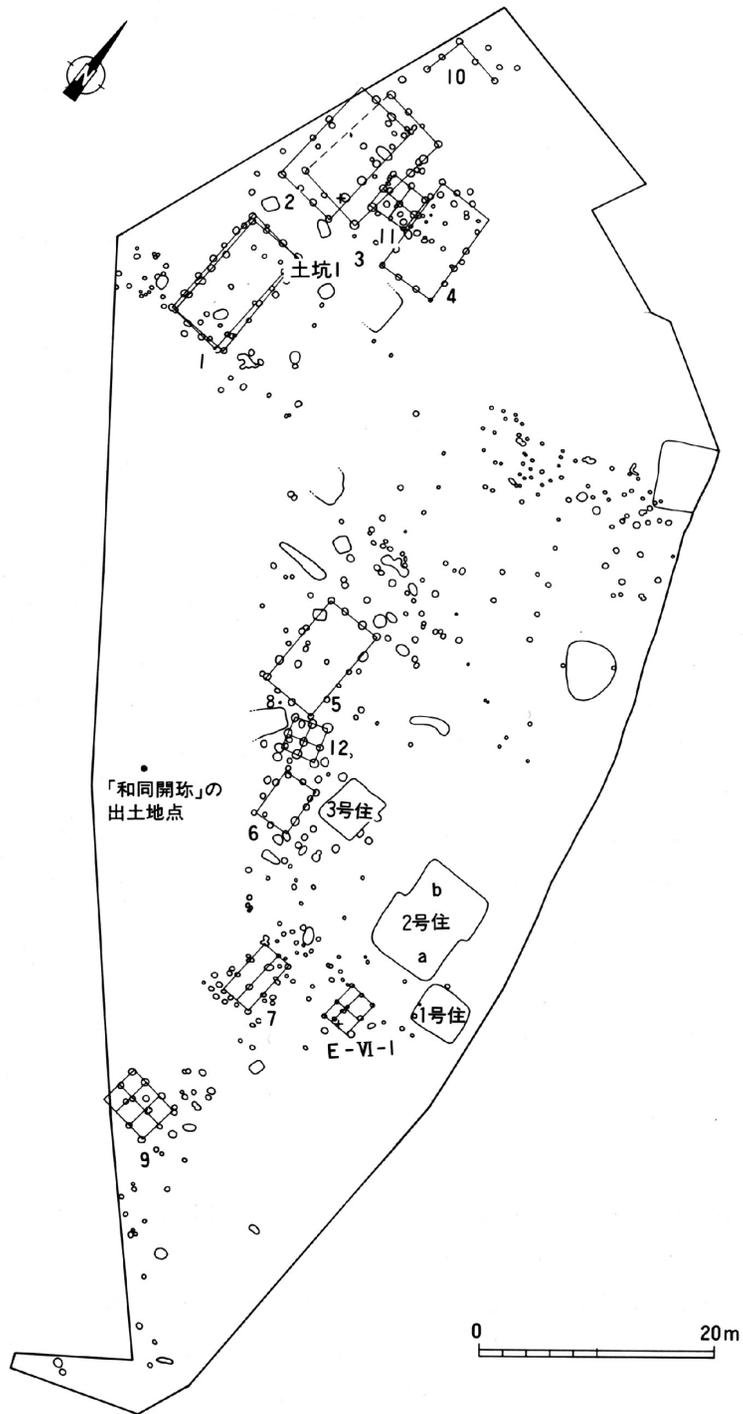


図 19 尾畑遺跡遺構分布図(南地区)

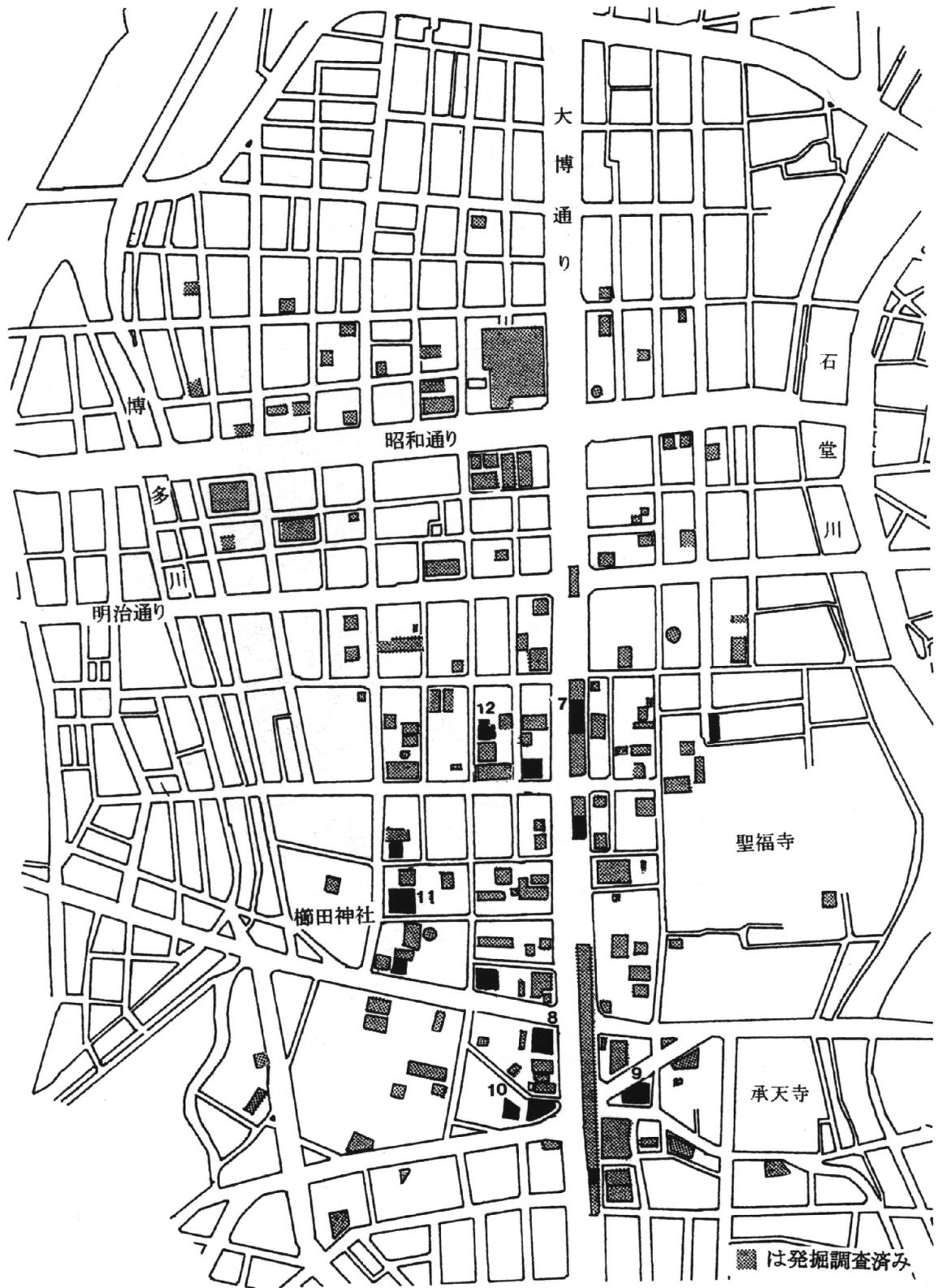


図 20 博多遺跡群発掘調査地域拡大図(黒塗りが古代銭貨出土地点・和同開珎出土地点は番号付)